<資　料>
〔古武道研究班〕

空手道の発展における地域的２軸性：沖縄と本土

中谷康司　宮本知次
青木清隆　小林勝法
数馬広二　外間哲弘

1．はじめに

我々はこれまで空手史研究の必要性を指摘し，その方法論として空手道の近代化についての歴史研究から始めること，またその視点として船越義珍に注目する必要があることについて論述してきた[1]．また，その論考の中で船越義珍を扱うにあたって，①船越義珍の稽古歴，②船越義珍の沖縄空手界での立場・評価（船越義珍上京前），③船越義珍の沖縄空手界での立場・評価（船越義珍上京後），④船越義珍の日本武道界での立場，⑤船越義珍による普及と指導方法，⑥船越義珍と弟子達との関係，の合計６つの研究課題を，今後，明らかにしていく必要があることを指摘した．

しかし，これらの研究課題について検討するには，重要な背景が存在する．前回の論考の中で述べたが，空手道の文化的発展の背景には２つの地域的な軸がある．即ち，空手道発祥の地とされる沖縄と，沖縄から伝播された「唐手」を独自に「空手道」まで発展させた本土の２軸である．近年，前者の空手道は「沖縄空手道」，後者は「日本空手道」と呼ばれ，区別される．今日では「空手道」あるいは「空手」として世界中で愛好される空手が，それぞれ別々の呼称を持つ背景には，地理的な隔たりや呼称に対する趣向の違いのみならず，歴史的な背景が存在するはずである．上述の研究課題を検討するにあたっては，この空手道の発展における地域的２軸性が，その諸相にわたって密接に関係していると考えられる．よって，船越義珍に関する研究課題に対する正確な理解を得るためには，この地域的な２軸性について，課題を検討することに先立って十分に整理し，理解する必要がある．そこで，本研究では空手道の発展におけ

る地域的2軸性を整理するとともに，この地域的2軸性が船越義珍，さらには空手道の近代化を明らかにするにあたってどのように関わってくるのかを考察する．

2．空手道の発展における地域的2軸性の諸相：沖縄と本土

空手道の発展において，沖縄と本土の地域的2軸性がどのように存在するのかを，発展の諸相（時代）に分けて整理する．我々は，時代の区分を空手道の発展の段階に合わせて次の5つに区分した．はじめに，1．沖縄における「空手」の地位確立の時代，次に2．本土における宣伝の時代（ここから地域的2軸性が始まる），3．日本武道としての地位確立の時代，4．戦後の復興と発展の時代，そして5．現在という区分である．この5つの区分に従いそれぞれの時代にみられる地域的2軸性を整理した．

2-1．沖縄における「空手」の地位確立の時代（1889年-1921年：明治22年-大正10年）

この時代における空手（当時は唐手，以下特別なものを除き空手と表記する）の発展は，まだ本土に空手が伝わっていないことから，沖縄における1つの軸で進行している．

沖縄においては，元々，空手の伝承は秘密裏に，また一部の地域で，しかも特定の人達によって，個人教授の形で伝承されてきた[2]．しかし，明治中期からこの秘密裏に行なわれていた空手が，様々な方法で一般に公開され，やがて広く認知されるようになる．このことから，この時代を沖縄における「空手」の地位確立の時代とした．

この時代を成立させた要素としては，まず①道場開設による個人教授からの脱却である．1889年（明治22年）それまで個人指導だけに教授方法が限られていたのに対し，那覇手の大家であった東恩納寛量は沖縄県初の空手道場を開設している[3]．この事実から，この時代の始まりを1889年（明治22年）とした．

次に②教育への導入である．沖縄県教育委員会の調査報告書によれば，「1905年（明治38年）に県立師範学校・県立第一中学校（現在の県立首里高校）において空手が正科とされる」[4]とある．導入時期に関しては若干の異説がある．外間哲弘による詳細な調査では，1901年（明治34年）に首里尋常小学校で体操の科目の一部として，1902年（明治35年）に沖縄県立男子師範学校，1905年（明治38年）に沖縄県立第一中学校で正課体育として空手が導入されたとされている[5]．また，宮城長順による1936年（昭和11年）の講演内容によれば，首里尋常小学校の正課導入時期は外間の調査と同様であるが，明治38年の県立師範学校および県立第一中学校での空手導入は，「唐手部」設置とされており[6]，正課導入とはされていない．いずれにせよ，1905

年（明治38年）頃には，空手が学校教育の中に導入され，それ以降，空手に触れる人口を飛躍的に増加させたことが，空手の認知拡大において大きな役割を果たしたことは間違いない．

また，明治初期の教育においては，伝統的な武術は近代的な学校教育にはなじまないとされ，正課への導入には否定的な傾向が強く，本土において剣道（当時は撃剣）や柔道が正課編入されるのは，日清・日露戦争による国粋主義的風潮の後押しを受けて，1911年（明治44年）になってからのことである[7]．よって，沖縄における武術の正課導入が1905年（明治38年）に行なわれていたとすれば，全国でも極めて先進的なものであったと言える．

さらに，③一般への広報活動である．船越義珍は，1905，1906年（明治38，39年）頃に同志を募って県下を空手の公開演武をしながら巡回するなど空手の公開と認知を得ることに尽力している[8]．また，その一方で，船越義珍はマスメディアを利用した空手の地位向上と正しい理解の普及にも努めている．1902年（明治35年）には地方新聞である『琉球新報』（1893年創刊）に空手の紹介記事を執筆したとされており[9]，また1914年（大正3年）にも「沖縄の武技」と題して『琉球新報』に3回の連載を行なっている[10]．このように地方新聞ではあるが，空手の概略が一般に書面として示されたことは，空手やその歴史に対する沖縄県内での正しい認識を深めることに重要な役割を果たしたと考えられる．

最後に④軍関係者や皇太子など県外有力者に対する演武会などの開催である．1910年（明治43年）12月，八代六郎司令官率いる海軍練習艦隊が那覇に寄港した折には，那覇の少年達による空手の集団演武会が披露され，沖縄師範学校において屋部憲通指導教官の下で選抜された乗組員将兵が「ナイハンチ」の型の特訓を受けている[11]．また，出羽重遠大将（第一艦隊司令長官）率いる第一艦隊が中城湾に寄港した折にも，船越義珍が沖縄県立第一中学校において海軍将校に対して合宿稽古を行なっている[12]．そして最も大きな出来事として，1921年（大正10年）3月6日，昭和天皇（皇太子時代）が渡欧の途中，沖縄に立ち寄った際，船越義珍が演武の指導者を拝命し，首里城正殿の大広間において空手の演武を台覧に供している[13]．このような県外有力者に対する空手の紹介は，県外に対する空手の認知を広げるだけでなく，それら県外有力者が残した空手に対する賞賛が，沖縄においても「空手は沖縄が誇れる文化である」という位置づけを一般に与える重要な働きを担ったと考えられる．

このような4つの取り組みによって，空手は沖縄県内において認知され，地位を確立し，一方では本土紹介の下地が作られていったものと考えられる．また，1917年（大正6年）には県下の空手の大家（屋部憲通，花城長茂，徳田安文，城間真繁，大城朝恕，徳村政澄，石川逢行，船越義珍，宮城長順，摩文仁賢和）が集まり沖縄唐手研究会を結成したとされている[14]．このようなことから，秘技から公開・一般化される流れに対して，沖縄の空手界が基本的には

一致団結して努力していた時代であったと考えることが出来る．

2-2．本土における宣伝の時代（1922年-1929年：大正11年-昭和4年）

2-2-1．本　　土

本土での最初の公式演武は，1916, 1917年（大正5，6年）頃に船越義珍と又吉真光が京都武徳殿において行なったとされている[15, 16]．しかし，この本土での宣伝の時代の幕開けは，1922年（大正11年）が妥当であると考えた．船越義珍は1922年（大正11年）4月，沖縄県学務課からの要請をうけて上京，5月文部省主催の運動展覧会にて空手の紹介を行なう[17, 18]．これがきっかけとなり，船越義珍は，さらに尚家，講道館，陸軍戸山学校などでも演武・解説を行ない[19]，そうしたつながりをもとに東京において指導・普及の道に入っていく．この船越義珍の上京が実際の本土での空手普及のスタート地点と考えられることからこの時代の開始時点とした．そして，船越義珍は上京の年の末には日本で最初の空手に関する解説書『琉球拳法唐手』を出版し[20]，引き続いて1925年（大正14年）の初頭には『錬胆護身唐手術』を出版している[21]．一方，指導面では1924年（大正13年）の「慶應義塾大学唐手研究会」の発足に引き続き，東京大学，第一高等学校などにおいても空手を指導するようになり，大学を中心として広がっていく本土空手の基礎を作ることになった．そうした指導の一方で，船越は各地で弟子とともに演武会を開催し，空手が本土で認知されるために尽力している．

また，船越義珍と同時期に琉球王家の大名出身である本部朝基も上阪している[22]．この本部朝基が1922年（大正11年）11月に京都市で催された拳闘対柔道の大会に飛び入り参加してボクサーを倒し，これが新聞各紙で報道されたために空手の威力を広く国内に伝えることになった[23]．その後，本部も各所の指導に招聘され，1927年（昭和2年）には本部朝基を師範とする東洋大学唐手研究会が発足する[24, 25]．また，1927年（昭和2年）には那覇手の大家東恩納寛量の弟子で剛柔流の創始者となる宮城長順（注：移住はしていない）が[26]，1928年（昭和3年）には糸洲安恒，東恩納寛量の両氏に師事した糸東流創始者の摩文仁賢和が相次いで本土に渡り，関西方面での空手普及を担うこととなる[27]．この他，1928年（昭和3年）に宮城長順が，京都大学や関西大学の学生とともに，武徳殿において演武したことは特筆すべきことである[28]．

さらに，この時代の締め括りとしては，「空手道」の成立があげられる．1929年（昭和4年）になると，船越義珍のもと，慶應義塾大学の唐手研究会が，「唐手術」を「空手道」に改め，研究会の名称も「唐手研究会」から「空手研究会」へと改称する[29]．現存する資料として，「唐手」という意味で「空手」の単語を使用したのは，1905年（明治38年）の花城長茂のメモが

最も古い[30]．また，船越自身も最初の著書『琉球拳法唐手』において「空手」という単語を登場させている[31]．しかし，これらは一般的な呼称として用いられていたわけではなく，この1929年（昭和４年）の名称変更が空手において大きな転換点となる．そして，慶應義塾大学空手研究会の５周年記念式典の席上で，船越義珍は「空手は既に宣伝の時代は過ぎ研究の時代に入った」と述べたとされる[32]．よって，この「唐手術」から「空手道」への改称と船越義珍の行なった宣言をもとにこの時代区分を区切ることにした．

２-２-２．沖　　縄

この時期，沖縄の空手界に大きな動きがあった記録はほとんど見られないが，1926年（大正15年）に嘉納治五郎が来琉した際には，摩文仁賢和，宮城長順らが中心となって演武会を開催している[33]．これは，その後，前述の摩文仁賢和，宮城長順の本土行きのきっかけになったとも考えられる．

２-２-３．ま　と　め

この時代には，当時最も沖縄で精力的に活動していた空手家の多くが本土入りしたため，本土においての空手は驚くほどの速さで普及が進んだ．しかし，一方では，そうした空手家の本土への流出に伴って，沖縄県下では空手指導者の空洞化が起こったことになる．沖縄においても空手の地位は確立されたばかりであり，試行錯誤が繰り返されている時期に，このような指導者の空洞化が起こったことは沖縄の空手界にとっては大きな打撃になったと推察される．このような理由から沖縄ではこの時代に本土ほどの大きな出来事は起こっていないと考えられる．

２-３．日本武道としての地位確立の時代（1930年-1945年終戦：昭和５年-昭和20年）

２-３-１．本土での努力

この時期に入ると本土に渡った船越義珍・摩文仁賢和・宮城長順らを師範として続々と各校で空手研究会が創設される．1930年（昭和５年）の拓殖大学から，日本医科大学，東京商科大学（後の一橋大学），関西大学，早稲田大学，慈恵会医科大学，中央大学，明治大学，國学院大学，立教大学，立命館大学，東京農業大学，東京工業大学，法政大学，日本大学，同志社大学，京都帝国大学などと続く[34, 35]．また，一般にも広く空手は浸透してゆき，1935年（昭和10年）には船越義珍を中心とした大日本空手道松濤會が出来るなど，本土では支部・組織体制も整えられ始める[36]．また，この組織拡大の流れの中，それまで個々の大学での稽古のみであったものが，演武会などを通して各大学の交流が始まる．そして，その流れは発展し，1936年（昭和11年）には船越義珍に師事する学生を中心としたグループが大日本学生空手道

聯盟を発足[37, 38]，1939年（昭和14年）にはもともと船越義珍の弟子であった大塚博紀に師事するグループが関東学生空手道連盟を発足するなど学生による組織化が活発になる[39]．一方，この頃，関東の大学間だけではなく，宮城長順や摩文仁賢和に師事する関西の大学との東西交流も盛んになっている．そして，1941年（昭和16年）に行なわれた明治大学空手部公認記念全日本学生空手道演武大会においては，松濤館，剛柔流，糸東流，神道自然流，和道流の各流派15校（東京帝国大学，慶應義塾大学，早稲田大学，立教大学，拓殖大学，東京農業大学，法政大学，慈恵会医科大学，日本歯科大学，立命館大学，同志社大学，関西学院大学，関西大学，日本歯科専門学校，明治大学）が参集し[40]，その懇親会の席上では段位なども含めたなんらかの統一機関を設けることに一同の意見がまとまり，その後，船越義珍・摩文仁賢和・宮城長順・花城長茂の各師範もこの意見に賛同したとされる[41]．この発案は最終的に太平洋戦争の開戦に伴い，戦前に実現することはなかったが，学生を中心とする本土の空手界が1つにまとまっていこうという大きなムーブメントを持っていたことを表す象徴的な出来事と言える．

このような組織化の大きな流れの中，1939年（昭和14年）には船越義珍を中心とするグループが，講道館（柔道）や有信館（剣道）にならび町道場の規模を遥かに凌ぐ面積（練習面積50坪）を持った空手道場「大日本空手道松濤館」を創設し，組織の中心となる場を確保することになる[42]．また，船越義珍は，1935年（昭和10年）に『空手道教範』を出版し[43]，その中で「唐」手を「空」手に変更する理由を明示することによって，空手道という言葉の一般化・固定化を図っている．これは本土をはじめ，その後沖縄にも大きな影響を及ぼしていくこととなる．

また，この時代には大日本武徳会での空手演武も盛んに行なわれるようになる．その流れの中で，1935年（昭和10年）には宮城長順（剛柔流）と小西康裕（神道自然流）が空手界初の称号を大日本武徳会から認定され[44]，引き続き多くの空手家が称号認定を受けている．この事実は，日本の武道界において空手が日本武道として認知され始めていたことを示すが，当初の空手は柔道の一部として扱われていた．また，称号審査においては，剣道や柔道は試合によって結果が明白になるのに対して，空手は試合制度がないために型の演武のみで審査が行なわれることから，公正な判断が出来ないとの他武道関係者から不満の声が多かったと言われている[45]．

一方，この時代の終盤，1942年（昭和17年）には各大学で空手が正課となっている[46]．この時期は太平洋戦争の戦時局面下であり，空手が戦地での効用を期待されたものと考えられる．事実，軍関係でも，陸軍中野学校，陸軍戸山学校などに船越義珍の高弟が教官として入り，その指導に携わっている[47]．このように，太平洋戦争に伴い，空手も戦争の影響を大きく受けるとともに，その発展は中断を余儀なくされる．

2-3-2．沖　　縄

前の時代区分と同様に，この時代の前半にも沖縄空手界の動きについて伝えている文献は余り多くない．中盤になり，1936年（昭和11年）になると，沖縄県那覇市において琉球新報社主催で「唐手座談会」が開催された記録が存在する．大西栄三著『空手史』に詳しい記録が記載されており，当時の沖縄における空手の動向を知るために貴重な資料となるので，以下にその内容から読みとれることをまとめる[48]．

その記録によれば，出席者は，屋部憲通，花城長茂，喜屋武朝徳，本部朝基，知花朝信，許田重発，城間真繁，宮城長順，小禄朝禎，仲宗根源和ら空手関係者と県教育関係者および警察・軍の関係者であり，話し合われた内容は「唐手」から「空手」への名称変更についてと沖縄県における空手の振興事業についてである．1つ目の名称変更については，既に東京で「空手道」という名称が一般的に使われているが，沖縄ではどうするかという問題について話し合っている．結論は最終的に「空手」に変更する方向性にまとまるが，その中に「唐の字で書いたものは沖縄の地方的なもの，空の字で書いたものは，一般的に日本武道としての空手というように区別されると，将来本家をとられることになる」という意見があるのは興味深い．また，2つ目の空手の振興事業については「現在，沖縄の唐手が不振の状態にあることは，歎かわしいことで，体育および，武道教育の両面から是非振興方法を講ずる必要があります」とその必要性が述べられている．これについては，沖縄県内に振興協会を作ることや「日本剣道形」にならい「日本空手型」を作ることなどの解決策が話し合われている．また，最後の主催者の挨拶には「中央で空手が盛んになったのは，本県の名誉でありますが，本場の本県であまり振るわないのは，甚だ遺憾であります」とのコメントが含まれている（以上，「　」内は文献48からの引用）．この座談会の記録からは沖縄における空手が当時，非常に不振であったこと，また本土との温度差に対する危機感を感じていることなどが読みとれる．

しかし，低迷していたと思われる沖縄空手界もこの座談会以降は活性化する．実際に，座談会が行なわれた1936年（昭和11年）の暮れには「沖縄縣空手道振興協會」が県知事を会長に発足している[49]．また，1937年（昭和12年）には座談会でも話し合われた空手道基本型十二段も制定されている[50]．しかし，この空手道基本型はあまり普及しなかったのか，1941年（昭和16年）には新たに沖縄県知事によって空手道専門委員会が組織され，長嶺将真考案の「普及型一」と宮城長順考案の「普及型二」を制定している[51]．

このように1936年（昭和11年）以降は，行政の介入もあり沖縄空手界も活発になる．しかし，本土同様，太平洋戦争に突入し，その活動は中断される．また，それ以降の主だった動きを掲載する資料は見られない．

2-3-3．ま と め

この時代，本土では大学への広範な普及を通して，様々な組織化の流れや本拠地の創設などが散見され，自然な発展の一途を辿っている．また，「空手道」という言葉の一般化や大日本武徳会による称号授与，軍関係への貢献などによって，空手が日本武道としての地位を確立していった時代であると言える．一方，沖縄では，前述の指導者空洞化の影響が残り，前半においては関係者が危機感を感じるほどに空手が低迷していた時代であり，また後半は行政介入によってそれを転換しようとした時代でもある．いずれにせよ，本土，沖縄ともに太平洋戦争終盤には，空手の発展は中断を余儀なくされている．

2-4．戦後の復興と発展の時代（1945年終戦-1988年：昭和20年-昭和63年）

2-4-1．本　　土

太平洋戦争における日本の敗戦とともに，連合国最高司令官総司令部（GHQ）は民主化政策のもとで武道を禁圧する[52]．1945年（昭和20年）11月には，学校における武道は正課・課外活動ともに禁止され，引き続き1946年（昭和21年）1月には，武道に関する教員免許状が無効となった[53]．この禁止は，柔道が1950年（昭和25年），弓道が1951年（昭和26年），剣道が1953年（昭和28年）に，それぞれが民主的なスポーツの1つとして復活することを許されるまで続いた[54]．

一方，空手道に関しては早稲田大学の大浜信泉教授（空手部部長，後に体育局長を経て総長）がGHQや文部省に対して「空手道はゼントルマンのスポーツである」と稽古継続を掛け合ったため，早々に稽古を再開できたとされている[55]．空手道のみ稽古の再開が許されたのは，戦前に本土最大の空手道団体であった松濤會（船越義珍の門下）が大日本武徳会に参加していなかったために空手道が戦争政策に協力していなかったと解釈されたことと，占領軍の将校の中に空手道と近接な関係にある中国拳法の修行者が大勢いたためではないかとの談話もある[56]．実際に，1946年（昭和21年）春には，中央大学（3月），早稲田大学（4月），明治大学（4月），拓殖大学（5月）などが稽古を再開している[57,58]．これに引き続き各大学でも稽古が再開され，次第に活動が活発になっていく．そして，1947年（昭和22年）には，船越義珍が疎開先の熊本より戻ったことを記念して歓迎記念演武会（早稲田大学において）が催され，和道流，糸東流，剛柔流，松濤館流の各校が参加するなど交流も盛んになる（後の全日本学生空手道連盟結成の契機となったとされる）[59]．その後の学生の流れでは，1948年（昭和23年）に六大学連盟（慶應義塾大学・早稲田大学・専修大学・中央大学・法政大学・拓殖大学）が結成され[60]，そして，1950年（昭和25年）には全流派を網羅した全日本学生空手道連盟が

結成されている[61]．この全日本学生空手道連盟はその後，毎年1回の合同演武会を開催し，各校の交流を深めている．この他に，1948年（昭和23年）には船越義珍を擁する日本空手協会が，1949年（昭和24年）には大塚博紀を擁する和道流によって全日本空手連盟がそれぞれ結成されている[62]．

この時代に本土の空手界が大きな転機を迎えるのは1957年（昭和32年）である．この年の4月26日に空手道の普及・発展に尽くしてきた船越義珍が永眠した．5月11日に松濤會によって告別式が営まれ[63]，6月21日には日本空手協会を中心に各大学空手部が結集し，全日本空手連盟（和道流）の大塚博紀，全日本空手道剛柔会の山口剛玄をはじめ，武道界からの多くの来賓を迎えて盛大な追悼演武会（両国国際スタジアムにおいて）が行なわれた[64]．

そして，この年，空手における公式試合が開始された．10月20日には日本空手協会が第1回の全国選手権大会を実施している[65]．また，11月30日には全日本学生空手道連盟も第1回全日本学生空手道選手権大会を開催し，29校（当時55団体が加盟）が参加している[66]．もちろん，これ以前にも，東京大学による自由組手や[67]，摩文仁賢和による試合化の検討[68]，あるいは1952年（昭和27年）に慶應義塾大学と早稲田大学が行なった試合形式の交換稽古など[69]，試合化の検討は限りなく行なわれているが，公式に行なわれた大きな大会はこれらが初めてである．

船越義珍は空手の試合化について反対であったと言われる[70]．東京大学の松田勝一による回想にも当時の東京大学における組手練習に船越義珍が反対であったことが記されており[71]，また船越義珍が1929年（昭和4年）に東京大学唐手研究会の師範を辞退した理由は会員が「組手試合」を行なったためとも言われている[72]．また，太平洋戦争において焼失した松濤館を再建して2代目館長となった江上茂も「空手に試合はない」との船越義珍の言葉を伝えている[73]．船越義珍は初期の著作『琉球拳法唐手』[74]や『錬胆護身唐手術』[75]の中で，空手は剛術で危険なために試合は出来ないとしながらも，防具や禁じ手を設けての試合制度を検討する余地があるとしていることから，試合制度に対する船越義珍の態度（賛否）については様々な見解が持たれる．このことは今後も十分に検討する必要があるが，後年の船越義珍の著書にはその記述が削られていること，また上記のような記録が残されていることから，後年，試合化に対して少なくとも全面的に賛成していたわけではないと考えられる．そのような立場にある船越義珍の死を契機に競技化・試合化が開始されている事実から考えれば，船越義珍の死は，単に1人の空手指導者の死というだけでなく，本土の空手界に，また，後には沖縄や世界の空手に大きな方向づけを与える，非常に重大な出来事であったと言える．

その後，1964年（昭和39年）には全日本空手道連盟が設立され[76]，本土の空手は試合制度

を通した発展の道を辿ることになる．1979年（昭和54年）の宮崎国体では空手道のデモンストレーションが行なわれ，1981年（昭和56年）の滋賀国体では空手道が国体の正式種目になっている[77]．

2-4-2．沖　　縄

一方，沖縄は激戦地であったこともあり，本土よりも復興が遅れている．戦後の沖縄での空手復興に関しては空手史家である宮城篤正が著した『空手の歴史』が貴重な軌跡を伝えている[78]．沖縄での空手復興は，当初，太平洋戦争で生存した空手家が僅かに個々の道場を設けて指導を行なっていただけであった．しかし，1956年（昭和31年）には沖縄県下の小林流，剛柔流，上地流，松林流の4派が沖縄空手道連盟を結成するなど，この頃には復興の兆しが見られている[79]．しかし，1963年（昭和38年）には小林流が脱退するなど，結成後の活動は低迷していたとされる[80]．このようなことから，1967年（昭和42年）にはこの沖縄空手道連盟が発展的に解消され，乱立する沖縄空手界を統一するべく全沖縄空手道連盟が結成されるが，これもやはり小林流の不参加など足並みが揃わない面があったようである[81]．しかし，この全沖縄空手道連盟は同年には称号審査を行ない，また翌1968年（昭和43年）には統一の段位級位審査を行なうなど組織としての機能を果たしている[82]．その後，様々な復興と発展が見られるが，1984年（昭和59年）に沖縄県教育委員会によって「学校における空手道の指導書」が作成され，県下の小中高校生の正課に空手が導入されることが決定されたのは特筆すべきことである[83]．

2-4-3．ま と め

この時代，本土では戦後の復興とともに，空手道団体の組織化が図られ，一応の結実を見せている．また，空手の試合化という1つの流れを主流として大きく発展した時代と言える．一方，沖縄でのこの時代の特徴は，先の本土に渡った船越義珍，摩文仁賢和，宮城長順といった世代を第1世代とした場合に，沖縄の第2世代ともいえるような指導者達（例えば知花朝信，長嶺将真など）によって新しい運営が始まったことである．方向性としては本土と同じく組織化の流れが強い時代と言える．

2-5．現在（1989-現在：平成元年-現在）

2-5-1．本土

本土において空手の分派は激しく，全てを記述することは難しい．しかし，前掲の全日本空手道連盟は，地域団体である各都道府県連盟および地区協議会，各競技団体（全日本中学校空手部連盟，全国高等学校体育連盟空手道部，全日本学生空手道連盟，全日本実業団空手道連盟），そして各流派からなる会派団体（全日本空手道連盟剛柔会，全日本空手道連盟糸東会，

（社）日本空手協会，日本空手道連合会，全日本空手道連盟錬武会，全日本空手道連盟和道会）によって構成され，これらの団体の集合体として現在も国内空手界を1つにまとめている[84]．また，全日本空手道連盟が主催する全日本空手道選手権大会も2006年（平成18年）には，34回を数えている．このように，日本の空手は沖縄の一部も含み，試合化・競技化の傾向を継承している．

しかし，近年，試合への著しい偏重から，ポイントを上げるための技術に特化するあまり，武術的身体操作の喪失や武道的思考の欠如，流派の特徴が消失するなどの様々な問題点が挙げられ，「競技空手」に対して「武道空手」もしくは「伝統空手」といったような問題提起が頻繁に行なわれるようになっている[85, 86, 87]．一方，このような武道としての空手を見直す潮流とは逆に，ショービジネスとしてさらに競技化を進める方向性も大きな一翼を担っている．いずれにせよ，空手道が再びその存在がどうあるべきなのか問われている時代だと言える．

2-5-2．沖　　縄

一方の沖縄では，1989年（平成元年）に西銘順治沖縄県知事（在任期間1978年-1990年：昭和53年-平成2年）が「空手大学」の構想を発表する[88]．これ以降，県行政における空手振興事業が飛躍的に促進されていることから，この時代の始まりを1989年とした．その後，沖縄県の教育委員会文化課は，1991年（平成3年）から3年間に渡り，外部の調査委員19名に委託して，空手道および古武道の基本調査を行なっている[89]．その報告書では，沖縄で発生した武道である「空手道・古武道（琉球古武道）」が空手道のスポーツ振興に伴い，試合化に適合した技法のみが注目され，伝統的武道として正しく継承されていないとの危惧のもと，伝統的武道を守り，「日本文化の一翼を担う地域文化・郷土文化として継承・発展させる」ために，「全会派・全流派を網羅した調査と記録保存の必要」性を説いている．また，この調査は沖縄空手道に関する文化財指定や空手道大学校の設立構想に耐えうる資料とすることを目標としている．更に，沖縄県教育委員会文化課はこの調査の継続事業として，1994年（平成16年）4月から1年間の調査期間で6人の調査委員による2回目の空手道・古武道基本調査を行なっている[90]．この調査では，空手道の歴史，基本的な型（形），系統図等および古武道の歴史と系統図についての調査が行なわれ，報告書がまとめられている．また，1995年（平成7年）には沖縄県教育委員会保健体育課によって組織された10名の編集委員によって『沖縄空手・古武道グラフ』がまとめられている[91]．これは，1997年（平成9年）に予定される県立武道館の落成とその記念事業として位置づけられる沖縄空手・古武道世界大会に向けて，伝統空手に対する県民の理解を高めることを目的に編纂されたものである．また，1995年（平成7年）には太平洋戦争・沖縄戦終結50周年事業として8月24日～8月28日の日程で沖縄空手・古武道

世界大会プレ大会が行なわれている．1997年（平成９年）には，このプレ大会から実際の世界大会までのあゆみを編集した『世界に躍進する沖縄空手・古武道』などが出版されている[92]．そして，1997年（平成９年）の８月21日～８月25日の日程で，沖縄空手・古武道世界大会が開催された．外間によれば，この1997年（平成９年）の世界大会には世界50カ国が参加し，沖縄県側の参加者が約2900人余，海外からの参加が1700人余の合計3600人以上が参加したとされる[93]．また，観客数も延べ9000人にのぼったとされている．こうした世界大会への盛り上がりとともに，1997年（平成９年）８月８日には県指定の無形文化財（空手・古武術）として長嶺将真（松林流）・八木明徳（剛柔流）・糸数盛喜（上地流）の３名の空手家が第１次認定を受けている[94]．そして，これに引き続き2000年（平成12年）９月12日には，伊波康進（剛柔流），友寄隆宏（昭平流），仲里周五郎（小林流），仲里常延（少林寺流），宮平勝哉（小林流），湧川幸盛（剛柔流）の６名が県指定無形文化財（空手・古武術）の第２次認定を受けている[95]．また，2003年（平成15年）には沖縄県が2002年度に実施した「沖縄デジタルアーカイブ整備事業」として組織されたコンテンツ制作事業とコンテンツ提供（発信）事業によって，Webサイト「Wonder沖縄」が開設され，この中に沖縄空手・古武道の豊富なコンテンツが設置された[96]．このWebサイトは世界に向かって沖縄文化「空手」を伝える役割を果たすことになる．2004年（平成16年）には「世界に沖縄が誇る貴重な「文化遺産」として関係者の献身的な努力により守り育てられてきた「沖縄空手道・古武道」が国内外に更に発展・普及することを支援する」目的で特定非営利活動法人「沖縄空手道・古武道支援センター」が沖縄県によって認可される[97]．また，同じく2004年（平成16年）には，沖縄県観光リゾート局が「沖縄県民の文化遺産として継承されてきた「沖縄空手道・古武道」を経済的にも価値を有する「文化資産」としてとらえ直し，「文化交流型観光」推進の観点から，沖縄空手道・古武道を通じた県内外，海外との交流を促進し，沖縄空手道・古武道の発展，関連産業の振興とともに，沖縄観光の振興を図る」ことを目的に「沖縄空手交流推進事業」を行ない，この調査をNPO法人沖縄空手道・古武道支援センターに委託している[98]．このように，1989年（平成元年）以降，行政のサポートによって沖縄を本場とする空手道として「沖縄空手道・古武道」の位置づけが確立し，これらの広報活動が行なわれるようになっている．また，近年では観光資源としての役割も認識され，地域振興事業の一環としても扱われるようになっている．

2-5-3．ま と め

この時代は，本土・沖縄ともに試合化の大きな流れを持った時代と言えるが，同時に試合化が進む弊害から，「空手道」はどうあるべきかという問い直しが始まった時代とも言える．その見直し方は多様であるが，「武道」としての空手に関する見直しは，本土・沖縄ともに起こ

っている．また，一方でショービジネスや観光資源として，商用的に見直される動きも大きく，多様な時代と言える．

3．沖縄における空手の文化財としての保護

3-1．無形文化財

現在，前節に記した9名の空手家が沖縄県の無形文化財として指定されている．沖縄県の指定であるため沖縄県下の空手家のみが認定されている．

3-2．史跡などの調査

中央大学保健体育研究所古武道研究班では，2006年（平成18年）3月に沖縄県那覇市内に存在する以下の空手関係の史跡調査を行なった（調査史跡一覧参照）．調査史跡は，①松村宗棍の墓，②糸洲安恒の墓，③花城長茂の墓，④感謝の松，⑤誉れの松，⑥東恩納寛量の生家跡，⑦宮城長順の生家跡，⑧先賢東恩納寛量・拳聖宮城長順顕彰碑，⑨松茂良興作碑，⑩聖現寺，⑪フルヘーリン洞，⑫沖縄県立第一中学校，⑬沖縄師範学校跡碑，⑭奥武山公園，⑮天尊廟，⑯久米36姓碑，⑰那覇商業高等高校，⑱福州園の合計18ヵ所である．これらの史跡の特徴としては，1．沖縄戦の激戦により焼失しているものが多く，最近立てられた石碑などが多いこと，2．那覇市の港湾部は明治期に比しても埋め立てが進んでいることや沖縄戦で地形が変形していることなどから正確な場所が判別しないものも多いこと，3．公的に立てられた石碑などが非常に少ないことが挙げられる．公的な石碑が少ない理由としては，それぞれの史跡について様々な解釈が存在し，また争いがあることから，公的な立場から恒久的な石碑の設置や碑文の掲載が出来ないことが1つの要因として考えられる．このような公的な動きの不足を補うために，民間において沖縄県空手博物館（1987年（昭和62年）～）が設置されるなどの動きも起こっている．

調査した空手に関係する史跡に関しては，空手との関係が示されていないものが多く，標識や案内なども殆ど存在しない．また，本土に渡り，空手普及の本拠地を移した船越義珍や摩文仁賢和に関する史跡は，本土の船越義珍の門下生が植樹した感謝の松・誉れの松だけであった．このような現状は沖縄が空手道のルーツとされながらも，本土からの渡航者の多くが沖縄に来ても自らの空手のルーツを見つけることが困難であるという現状を指し示している．

4．沖縄空手道と日本空手道

4-1．沖縄空手道・日本空手道という言葉の発生時期

4-1-1．沖縄空手道

「沖縄空手道」という言葉の初出は不明であるが，1956年（昭和31年）に沖縄県下の小林流・剛柔流・上地流・松林流の4流派が合わさって沖縄空手道連盟（初代会長：知花朝信・小林流）が結成されていることから，少なくともこの時期には「沖縄空手道」という言葉が使用されていたことがわかる[99, 100]．それ以降には，書籍などにも「沖縄空手道」の文字が見られ，現在公立図書館に所蔵される書籍の中では，1964年（昭和39年）の錬道館空手研究会編『沖縄空手道並に王統記』が最も古く[101]，著名なものでは1977年（昭和52年）の上地完英による『沖縄空手道：その歴史と技法』がある[102]．少なくとも沖縄では1936年（昭和11年）までは「唐手」という言葉を用いることが指導者の間でも一般的であり，「空手」という言葉が用いられるようになるのはそれ以降である[103]．よって「沖縄空手道」という言葉は，1936年以降，1956年以前に生じたものと考えられる．恐らく戦後，後述の「日本空手道」に対して，本場である沖縄の空手道という意図のもとに「沖縄空手道」という概念が生じ，そうした動きが沖縄空手道連盟結成に結びついていったものと推察する．

4-1-2．日本空手道

「日本空手道」の正確な初出も不明であるが，1935年（昭和10年）に船越義珍を中心とする「大日本空手道松濤會」が発足していることから少なくとも昭和10年には用いられている[104]．しかし，「大日本空手道松濤會」の前身である「大日本空手道研究会」の名称にも「日本空手道」の文字が見られることから，それ以前から使用されていたものと考えられる[105]．その時期は，「大日本空手道研究会」の設立が1930年（昭和5年）とされること[106]，また1929年（昭和4年）10月20日，慶應義塾大学空手研究会5周年の記念大会において船越義珍が「空手は禅に始まり印度を経て支那少林寺に渡り，更に琉球を経て日本に渡り日本で発達した」と発言したとされ，従前の「琉球拳法」に対して日本への意識が増していることなどから[107]，1929，1930年頃から使用され出したものと考えられる．更に，1929年には船越義珍の同意のもと，慶應義塾大学唐手研究会が「唐手」を「空手」に改めていることから[108]，「唐手術」から「空手道」への呼称変更に際し，「日本空手道」という考え方が生まれてきたものと推察する．

4-1-3．ま と め

これらのことから，源流という意味では沖縄空手道に対し日本空手道という順序になるが，

言葉の発生を時間的な軸で考えると日本空手道に対して沖縄空手道という順序になる．

4－2．沖縄空手道と日本空手道における流派

実際に沖縄空手道と日本空手道を構成する流派にも違いがある．日本空手道の4大流派が松濤館流・剛柔流・糸東流・和道流とされるのに対し，沖縄空手道では小林流・剛柔流・上地流・松林流の４大流派となる．

4－2－1．日本空手道

松濤館流は，船越義珍が大正11年に沖縄から本土に渡り普及・発展させたものである．船越義珍は主に安里安恒・糸洲安恒に師事していることから首里手（首里地方に発展した空手）の系統である．剛柔流は宮城長順が昭和初期（昭和２年～昭和17年）に度々本土を来訪し[109]，関西地区を中心に普及，その後同地域を中心に発展したものである．宮城長順は主に東恩納寛量に師事していることから那覇手の系統である．糸東流は摩文仁賢和が，やはり昭和初期に本土に渡り，関西地区を中心に普及・発展させたものである．摩文仁賢和は糸洲安恒（首里手）・東恩納寛量（那覇手）に師事していたことから，首里手・那覇手が混合した系統と言える．和道流は主に船越義珍に師事した大塚博紀によって本土で誕生した系統である．

4－2－2．沖縄空手道

一方，沖縄空手道の系譜においては，小林流が糸洲安恒に師事した知花朝信によって1933年（昭和８年）に他の首里手系統の空手と区別するために命名された[110]．首里手系統に分類される．剛柔流は，上述の宮城長順によって普及され，那覇手を代表する系統である．近年では，本土の剛柔流と区別して沖縄剛柔流と称することが多い．上地流は，創始者である上地完文の長男上地完英の道場開設に伴って1940年（昭和15年）に命名された[111]．島袋によれば[112]，上地完文は1897年（明治30年）に中国福建省福州に渡り，周子和に師事して13年間，拳法の修行をする．上地流は，1910年（明治43年）に帰国した上地完文が，1926年（大正15年）から就職のために転出した和歌山県において中国から学んだ唐手を「パンガイヌーン流」として教授を始めたことに始まる．その後，上地流を継承する上地完英が，1942年（昭和17年）に沖縄に帰郷し，道場を開設するとともにそれ以降沖縄県内において普及したことから沖縄空手道の一大勢力となった．松林流は長嶺将真によって1947年（昭和22年）に命名された[113]．長嶺将真は喜屋武朝徳（首里手）と松茂良興作（泊手）に師事していることから，首里手と泊手を混合した系統である．首里手を代表する松村宗棍および松茂良興作の松の字を取って命名したとされる．沖縄県内ではこうした４大流派の他にも数多くの流派が存在する．また，流派名での系統分けではなく，首里手・那覇手・泊手，これに上地流を加えて，４つの系統として分

類することも多い.

4-2-3. ま と め

このように，日本空手道，沖縄空手道ともにそれぞれの系統が分かれるが，沖縄県内に本拠地を置きながら本土に普及した宮城長順による剛柔流を除いては日本空手道と沖縄空手道の間にはほとんど接点が無い．日本空手道の松濤館流，糸東流もそれぞれ当時の沖縄県下の大家である船越義珍，摩文仁賢和によって普及されたにもかかわらず，その本拠地を本土に移したことによって，沖縄県内にその流れを汲む者は殆どいない．これは空手道の伝承が師弟の密接な関係を前提としてしか成立しないことによるものと考えられる．このように，剛柔流を除いた沖縄と本土の間の隔絶は日本空手道と沖縄空手道の接近を難しくしている．

5. おわりに

本研究では，空手道の発展における沖縄と本土という地域的な２軸性を発展の諸相に分けて整理するとともに，沖縄の空手文化財保護の在り方，「沖縄空手道」と「日本空手道」という言葉の概念について整理してきた．このような整理によって空手道の発展における地域的2軸性が，どのような問題を持っているのかが明らかになってきた．その１つ目は，大正から昭和にかけて沖縄の空手指導者が本土に流出することによって，沖縄の空手指導者の空洞化が起こり，本土と沖縄の間に普及の格差が出来たことである．また２つ目は，戦後の沖縄における空手の復興は第2世代によって行なわれたために，第１世代を始祖とする本土の空手とは人脈的な断絶が生じたことである．そして，最後に，第１世代が空手を日本の武道へと高めようと尽力したのに対して，現在では沖縄空手道という言葉に代表されるように，どちらかと言えば地域振興的に考えられる向きが強く，第１世代の流れから考えれば，ある種逆行した流れが生じていることである．船越義珍は本土での空手普及をリードしてきた存在である．船越義珍が望んだにせよ，望まなかったにせよ，様々な発展の種とともに様々な問題の種を撒いてきたのも船越義珍である．上記に挙げた空手道の発展における地域的２軸性が引き起こした問題点にも，その諸相にわたって船越義珍は大きく関わっている．先に挙げた船越義珍の６つの研究課題を解決していくに当たっては，このような地域的な２軸性が生みだした問題点が背景に存在することを認識しながら，数多くある不明な点を明らかにしていく必要があるだろう．

（資料）沖縄県空手関係史跡調査一覧

本調査は，2006年（平成18年）３月，中央大学保健体育研究所研究費の支給を受けて行なわれた．

１．首里手関係

首里手は，首里士族の間で発展した空手のことを言う．

１－１．松村宗棍の墓（文献114-118からの引用および碑文をまとめた）

所在地：那覇市真嘉比３－１－８　共同墓地内

説　明：松村宗棍は1809年に首里山川に出生．唐名を武成達，号を雲勇または武長とも称した．松村は幼少の頃から赤田の唐手佐久川こと照屋筑登之親雲上寛賀に師事する．また，科挙の試験に合格すると，その後，尚灝王（1787-1834，1804年即位），尚育王（1813-1847，1835年即位），尚泰王（1843-1901，1848年即位）の３代にわたって王家に仕えることになる．松村は空手のみならず，示現流を修めたことでも有名である．また，佐久川の推薦で北京に渡る機会も得ている．首里士族の武術は，佐久川と松村によって形成・発展させられたと言われている．松村の高弟には，安里安恒，糸洲安恒などがいる．1899年首里山川２丁目にて没する．

現　状：共同墓地内に松村家の墓があり，区画内に松村宗棍碑が設置されている．2000年に現在の地に移設されている．

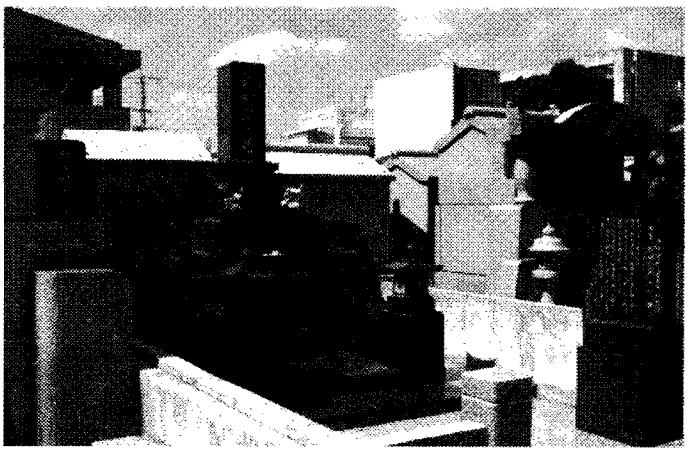

写真１　武氏　松村家之墓

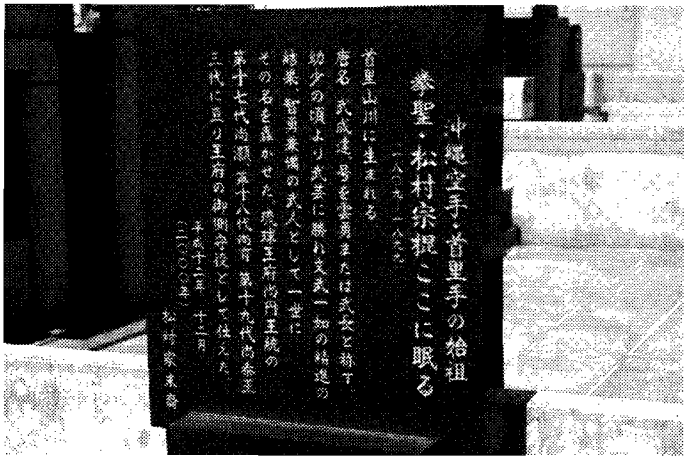

写真２　松村宗棍碑

沖縄空手・首里手の始祖
拳聖・松村宗棍ここに眠る
（一八〇九―一八九九）
首里山川に生まれる。
唐名、武成達、号を雲勇または武長と称す。
幼少の頃より武芸に勝れ文武一如の精進の
結果、智勇兼備の武人として一世に
その名を轟かせた。琉球王府尚円王統の
第十七代尚灝、第十八代尚育、第十九代尚泰王、
三代に亘り王府の御側守役として仕えた。
平成十二年　十二月
（二〇〇〇年）
松村家末裔

図１　松村宗棍碑・碑文

１－２．糸洲安恒の墓（文献119，120からの引用および碑文をまとめた）

所在地：那覇市真嘉比３－１－８　共同墓地内

説　明：糸洲安恒は1831年（天保２年）に首里山川に出生．空手は松村宗棍に師事した．糸洲の当初の師匠については異説もある．1901年（明治34年）４月，初めて首里尋常小学校で体操科の中に空手が採用された時，糸洲はその指導を担当した．また，1905年（明治38年），師範学校および中学に空手が採用されると糸洲は嘱託として指導にあたり，多くの門下生を出した．この期間に平安初段から五段までの型も創作している．1908年（明治41年）10月には「空手心得十ヶ條」を書き，県当局に対して空手の有意性を説く意見書を提出している．更に，書にも長け，御祐筆の科に合格してその役も勤めた．1915年（大正４年）１月26日に85歳で没する．戒名は「顕明院光遠宗徳信士」，位牌は曾孫にあたる糸洲安剛氏宅に安置されている．主な高弟として，屋部憲通，富名腰義珍，花城長茂，喜屋武朝徳，知花朝信，徳田安文，大城朝恕，摩文仁賢和，城間真繁などがいる．

現　状：共同墓地内に糸洲家曩祖之墓があり，区画内に拳聖糸洲安恒先生顕彰碑が設置されている．墓地は2001年に現在の地に移設されている．拳聖糸洲安恒先生顕彰碑は元々，1964年（昭和39年）８月30日，糸洲の弟子である知花朝信らが中心となって，親族とともに真和志の古島の墓地内に建立されていたものが移設されたものである．

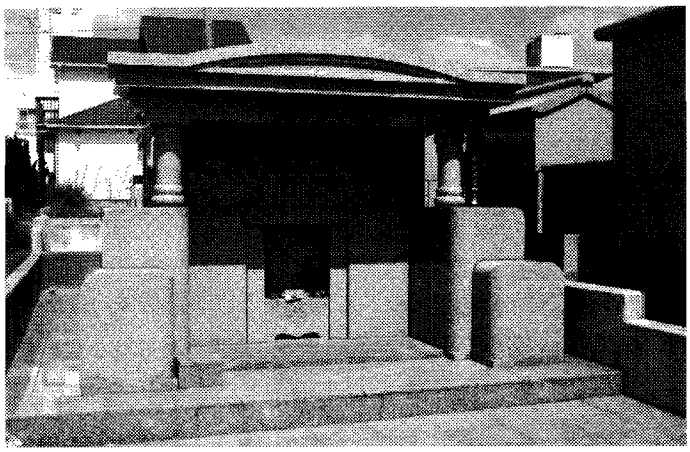

写真３　馮氏　糸洲家曩祖之墓（2001年6月吉日建立）

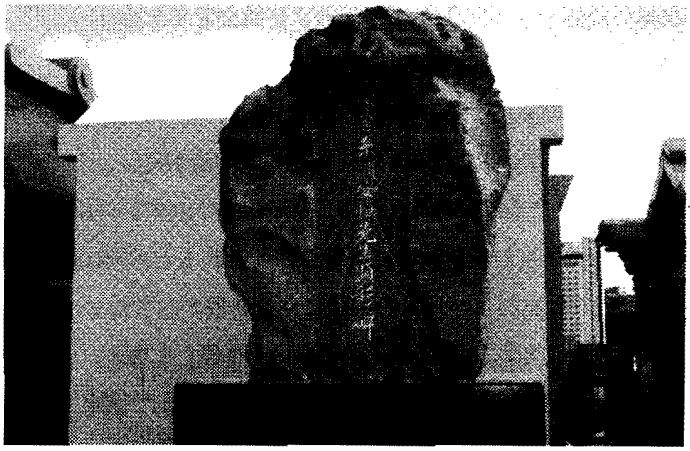

写真4　拳聖糸洲安恒先生顕彰碑

拳聖糸洲安恒先生顕彰碑

糸洲安恒先生は道光十一年首里儀保に生まれ、大正四年三月山川に於て八十五歳で逝去されたのであるが、その間奥義を極めた空手道の普及に尽力され特に門外不出の斯道を学校体育として指導普及し、今日の如き隆盛に至らしめたその功績は実に偉大である。師の逝去五十周年を迎えるに當りその流れを汲む門弟相諮って、ここに碑を建て偉業を顕彰する所以である。

一九六四年七月

建立者　小林流空手道協会　会長知花朝信

外会員一同

伊良波長幸謹書　　石嶺実彦刻字

図2　拳聖糸洲安恒先生顕彰碑・碑文

1－3．花城長茂の墓（文献121，122からの引用および碑文をまとめた）

所在地：那覇市真嘉比3－1－8　共同墓地内

説　明：花城長茂は1869年に首里山川に出生．志願兵として日清戦争，日露戦争に参戦，参戦後陸軍中尉となる．政治面においても明るく，真和志村村長を務めた．1905年（明治38年）8月，「唐手」を「空手」の文字で記述したメモを残していることで知られる．

現　状：共同墓地内に花城家の墓があり，区画内に親族によって建立由来の碑が設置されている．建立由来の碑の碑文中に花城長茂に関する記述もある．真嘉比古島地区の区画整理に伴い，同地より2002年に移設されている．

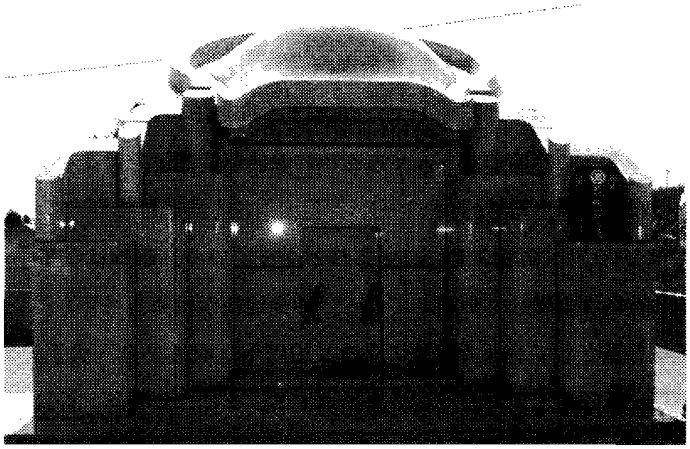

写真５　明氏　花城家之墓（2002年６月吉日建立）

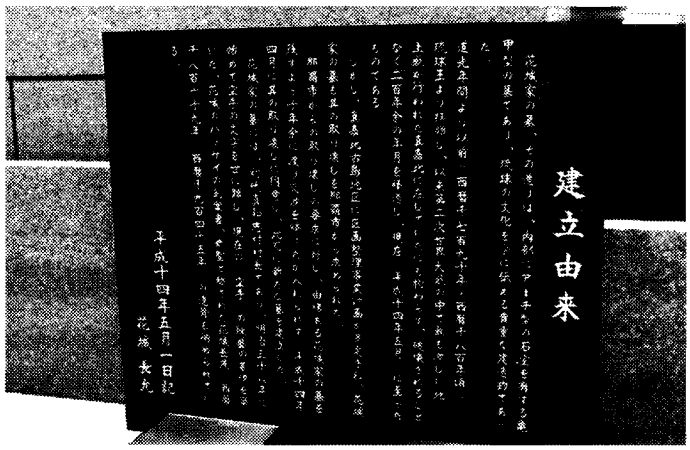

写真６　花城家之墓・建立由来碑

建立由来

花城家の墓、その造りは、内部にアーチ型の石室を有する亀甲型の墓であり、琉球の文化を今に伝える貴重な建造物であった。道光年間より以前（西暦千七百九十年～西暦千八百年頃）琉球王より拝領し、以来第二次世界大戦の中で最も激しい地上戦が行われた真嘉比に在していたにも拘わらず、破壊されることなく二百余年の年月を経過し、現在（平成十四年五月）に至ったものである。

しかし、真嘉比古島地区に区画整理事業計画が策定され、花城家の墓も其の取り壊しを那覇市から求められた。

那覇市の取り壊しの要求に対し、由緒ある花城家の墓を残すよう十年余りに渡り交渉を続けたが入れられず、平成十四年四月に其の取り壊しに同意し、此処に新たな墓を建立した。

花城家の墓には、初代真和志村村長であり、明治三十八年に始めて空手の文字を世に顕し、現在の「空手」の隆盛の基礎を築いた、花城のパッサイの創案者、拳聖と称された花城長茂（西暦千八百六十九年～西暦千九百四十五年）の遺骨も納められている。

平成十四年五月一日記

花城長允

図３　花城家之墓・建立由来碑・碑文

1－4．感謝の松（文献123，124からの引用および杭に記載された文をまとめた）

所在地：那覇市首里末吉町1－3－1　末吉公園内

説　明：船越義珍の生誕130年を記念して，1998年（平成10年）8月27日，その功績を称え，また郷里那覇市に感謝の意を表するために松濤館の門下生によって植樹された．船越義珍は1968年（明治元年）11月10日，首里山川に士族船越義枢の1人息子として出生．戸籍上は1970年（明治3年）の生まれとなっている．船越は首里手の大家安里安恒と，その後糸洲安恒にも師事している．沖縄師範学校講習科を卒業し，代用教員を経て，正規教員として各地で教壇に立つ．1912年（明治45年・大正元年），出羽大将指揮下の第一艦隊の海軍将校に空手を指導する．また，この年，沖縄尚武会の会長になる．続いて，1921年（大正10年）皇太子裕仁殿下（昭和天皇）の空手演武台覧（首里城正殿大広間）の指揮をとるなど重責を担う．1921年（大正11），文部省体育展覧会での発表のために上京．以後，講道館での演武を皮切りに，東京での空手普及に努める．また，慶應大学をはじめ，東京大学，第一高等学校，拓殖大学，日本医科大学，東京商科大学，早稲田大学などの各校で空手を指導し，各校での空手部創設時には師範として迎えられた．1929年（昭和4年），「唐手」の文字を「空手」に変更し，常用した点も大きな功績である．また，1939年（昭和14年），首都東京最初の空手道場「松濤館」を東京都豊島区雑司ヶ谷に建設した．日本最初の空手の教本『琉球拳法唐手』（1922年）をはじめ，『錬胆護身唐手術』（1925年）『空手道教範』（1935年），『空手入門』（1943年）『空手道一路』（1956年）など多くの空手教本を出版している．1957年（昭和32年）4月26日，90歳の空手人生を閉じた．「日本空手道の父」もしくは「近代空手道の父」などと呼ばれる．

現　状：現在も植樹当時の位置にある．標示は，感謝の松付近の杭のみである．

写真７　感謝の松

恩師の松濤翁船越義珍先生
生誕百三十年を記念し
先生と郷里那覇市への感謝をこめ植樹す
一九九八年八月吉日
日本空手道松濤會々長　廣西元信
生誕百三十年記念実行委員長　高木丈太郎

図４　杭・文面１

船越義珍先生　略歴
明治元年（一八六八年）首里山川町に生る。
沖縄尚武会会長等歴任。
一九二二年空手普及の爲上京。
一九五七年四月二六日逝去された。
行年九十歳

図５　杭・文面２

１－５．誉れの松（文献125，126からの引用および杭に記載された文をまとめた）

所在地：那覇市首里末吉町１－３－１　末吉公園内

説　明：船越義豪（よしたか）の没後60年を記念して，2004年（平成16年）７月５日，その功績を称え，また郷里那覇市に感謝の意を表するために松濤館の門下生によって植樹された．鍬入れには，高木丈太郎（松濤館理事長・館長），當銘芳二（那覇市助役），久高友弘（那覇市議会議員），船越義彰（親族），宮城篤正（元浦添市美術館館長），砂辺長盛（那覇市建設管理部長）らが参加した．船越義豪は，1906年（明治39年），那覇市において船越義珍の三男として出生．その後，上京して父船越義珍に師事して

空手道の稽古を積む．師範代下田武の死後は，船越義珍の後継者として多くの大学で指導にあたり，門下生の多くがその後国内外で指導者となっている．終戦の年，1945年（昭和20年）11月24日に39歳で病没している．

現　状：現在も植樹当時の位置にある．標示は，誉れの松付近の杭のみである．

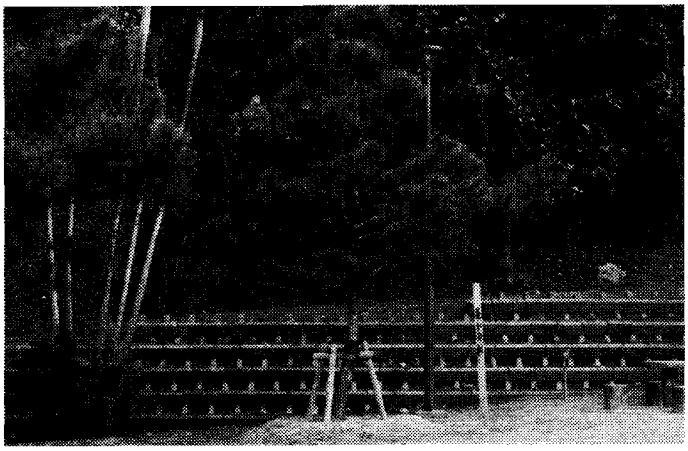

写真8　誉れの松

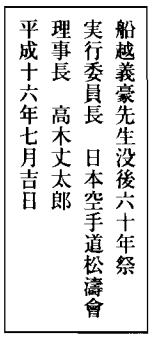

図6　杭・文面

2．那覇手関係

那覇手は，久米村に発祥する空手の系統に分類され，東恩納寛量や宮城長順が中国から持ち帰った技術を加えて発展させたものである．

2-1．東恩納寛量の生家跡（文献127-129からの引用）

所在地：那覇市西2-4-17　那覇ショッピングセンター前駐車場付近

説　明：東恩納寛量は，1853年（嘉永6年）3月10日，慎姓，東恩納寛用の四男として，那覇の西村で出生．童名を慎善熙と称した．「那覇手中興の祖」と呼ばれる．空手は久米村の新垣世璋に師事した．そして，1875年（明治8年）頃，義村朝明から琉球館に対する紹介状を貰い，密航船を使って福州に渡航，拳法の修行を積む．東恩納寛量の中国での師匠が誰であるかについては音のみが伝わっているため諸説あるが，謝崇祥であるという説（文献127）や，鄭礼公であるという説（文献128）などがある．東恩納は1877年（明治10年）に帰国し，その後も稽古を続ける．そして，1889年（明治22年）には沖縄初の空手道場を那覇に開設し，空手を指導することになった．著名な門下生には，許田重発や宮城長順等がおり，1902,3年（明治35,6年）頃から指

導を受け，後に那覇手を継承する指導者となっている．1915年（大正４年）に63歳で逝去した．葬儀は西新町２丁目の生家で行なわれた．

現　状：生家は存在せず，また東恩納寛量生家跡であることを示す石碑などもない．

写真９　東恩納寛量の生家跡付近

２－２．宮城長順の生家跡（文献130－133からの引用）

所在地：那覇市東町12　東町南公園付近

説　明：宮城長順は，1888年（明治21年）４月25日に那覇市東町1－11で出生．11歳の頃，新垣隆功（1875－1961）に空手の指導を受ける．その後，1902年（明治35年）に新垣の紹介で，東恩納寛量に師事した．また，1905年（明治38年），沖縄県立第一中学校に入学している（この年，空手が正課に採用された）．1908年（明治41年）から1910年（明治43年）まで兵役を務める．師，東恩納寛量の没後，1915年（大正４年）に福建省福州，また1936年（昭和11年）には上海に渡航し，拳法の修行や交流を行なっている．また，那覇尋常小学校をはじめ，警察，師範学校，那覇商業高校や，本土では関西大学，立命館大学，同志社大学などの各大学で空手を指導した．1953年（昭和28年）10月８日，65歳の生涯を終えた．「武備誌」の拳之大要八句の「法剛柔呑吐」から「剛柔」をとり，1933年（昭和８年），空手界において日本で初めて流派名「剛柔流」を称した．また，1937年（昭和12年），やはり空手界において日本で初めて「教士号」を授与されたことも広く知られている．

現　状：生家は存在せず，正確な場所を知ることは出来ない．この付近が宮城長順生家跡であることを示す石碑などはない．

写真10　宮城長順の生家跡付近

2－3．先賢東恩納寛量・拳聖宮城長順顕彰碑

所在地：那覇市松山1－17　松山公園内

説　明：前述の東恩納寛量，宮城長順の功績を称えた碑である．

現　状：松山公園内に顕彰碑が設置されている．

写真11　東恩納寛量・宮城長順顕彰碑

略伝ト遺訓

東恩納寛量先生（一八五三～一九一七）ハ那覇市西町ニ父寛用母真鶴ノ四男トシテ生ル二十才ニシテ中国福建省福州ニ渡リ南派小林拳術白鶴拳ヲ十五年間修行シ一八八九年那覇ニ唐手道場ヲ開クコレハ唐手道場トシテハ最モ古キモノナリ那覇手トハ先生ガ中国ヨリ歸国後自ラ修行セシ白鶴拳ヲ基礎トシ那覇ヲ中心ニ普及シタ「手」ヲ云フモノナリ

訓ニハ　唐手ヲ修行スルモノハ社会ノ為ニナレ　唐手ハ術モ必要ナレド道モ必要デアル

即チ精神ガ最モ大切デアル

宮城長順先生（一八八八～一九五三）ハ剛柔流空手道ノ始祖デアリ「武士」ノ名ヲ冠サレテイル、即チ武人トシテ空手道史ニ特筆サレルト共ニ人間トシテモ師表サレルベキ尊稱デアル那覇市東町ニ生レ十四才ニシテ東恩納寛量先生ニ師事シ中国福建省ニ渡リ拳術ヲ研究シ一九三〇年剛柔流空手道ト流派名ヲ名乗ル　コレ日本ニ於ケル最初ノ流派名デアル

訓ニハ　剛柔流空手道ノ極意ハ型ノ中ニ在ルト知ルベシ

剛柔流空手道ハ己ノ内ニ天地自然ノ調和ヲ表現スベキナリ

剛柔流空手道ハ徳ノ道ヲ追求スルモノナリ

一九八七年　長順先生生誕百年記念建立

有志一同

酒井秀岳書

図７　東恩納寛量・宮城長順顕彰碑・碑文

３．泊手関係（文献134からの引用および碑文をまとめた）

泊港は首里王府の貿易港として，海外からの玄関口であった．泊村の人達は，諸外国との文化交流を通じて，漢字，芸能，音楽，武術などを身につけ，様々な分野の大家を輩出している．空手道もその１つであり，聖現寺付近の漂着民によって伝えられたとされる．照屋規箴，宇久嘉隆を始祖とし，松茂良興作（1829-1898）が中興の祖と呼ばれる．

３－１．松茂良興作碑（文献135-137からの引用および碑文をまとめた）

所在地：那覇市泊３－12　新屋敷公園内

説　明：松茂良興作は1829年（道光９年）３月18日，雍氏姓松茂良興典の長男として，泊村（戦前の高橋町）で出生．童名を樽金，唐名雍唯寛と称した．首里手・那覇手と並ぶ

泊手の中興の祖と呼ばれる．松茂良は，泊の聖現寺の周辺に居住していた漂着者から派生した泊手を，照屋規箴（1804～1864），宇久嘉隆（1800～1850年）の両師に習い，泊手を継承した．後に，松茂良は泊浜近隣の洞窟に住んでいた中国人に教えを受けたとされている．1898年に没する．聖現寺に安置される位牌には，松茂良筑登之親雲上興作，戒名「寿雲道栄信士」，11月7日死去と記されている．

現　状：新屋敷公園内に顕彰碑が設置されている．

写真12　新屋敷公園・門柱

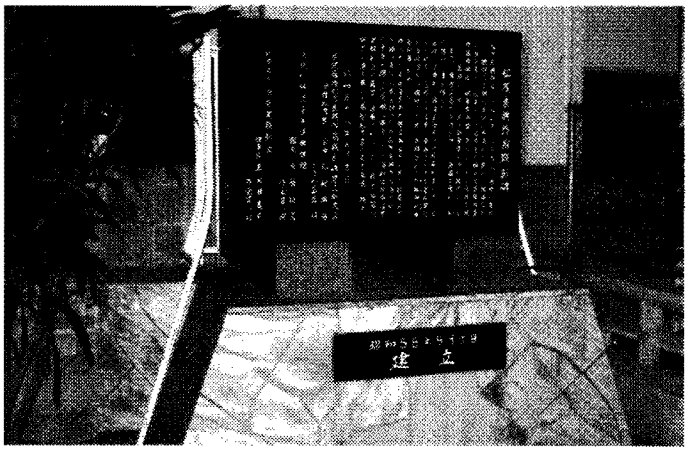

写真13　松茂良興作顕彰碑

松茂良興作翁顕彰碑

松茂良興作（一八二九―九八）は泊村に生まれた。聰明なる師は天分に恵まれた武人と強健なる小軀を生かし若年にして泊空手の師宇久嘉隆、照屋規箴両師匠に師事数年後に武人としての頭角を現した。義侠心に厚く或る時薩摩の侍が抜刀して泊の良民に罵詈乱暴する処を押さへた。後難を虞れ一時名護村に身を隠した。

泊村には昔から琉球王府よりの共有財産の外に王府の科挙に合格して官吏に登用された山里長賢翁が泊村住民の福祉のために寄贈された内輪御持（共有財産）があった。

明治十二年廃藩置県の際日本官吏が其の財産迄引揚げるべく策を計ったが松茂良興作外泊の武人の身命を賭した気概に断念し、この浄財は今尚泊先覚顕彰会の基金に活用されている。我々は破邪顕正の道を貫いた拳聖松茂良の名を永遠に残す。

昭和五十八年五月吉日

系統雍姓松茂良興作翁顕彰碑建立期成会

旧姓松茂良・　会長　松村興勝

ときわ会一同

法統松林流空手道興道館

館長　長嶺将真

外会員一同

財団法人　泊先覚顕彰会

理事長　真栄田義見

外会員一同

図８　松茂良興作顕彰碑・碑文

３－２．聖現寺（文献138, 139からの引用）

所在地：那覇市上之屋392

説　明：聖現寺は，真言宗の寺院であり，天久宮（神社）とともにあることから「天久の寺」と俗称される．沖縄では真言宗の寺院と神社が共存している．他には，護国寺と波上宮（那覇市），臨海寺と沖宮（那覇市），神徳寺・八幡宮（那覇市），神応寺・識名宮（那覇市），遍照寺・末吉宮（那覇市），神宮寺・普天間宮（宜野湾市），観音寺・金武宮（国頭郡金武町）などがある．この聖現寺は松茂良興作の位牌が安置されていることから松茂良由来の地とされる．聖現寺の近隣には，松茂良が師事した照屋規箴の先祖の墓があり，松茂良はその墓庭において師匠との稽古を行なったとされる．

現　状：松茂良興作に関する石碑などは設置されていない．

写真14　聖現寺・正面

3－3．フルヘーリン洞（文献140-143からの引用）

所在地：那覇市上之屋392　聖現寺北方の丘の上

説　明：聖現寺の近隣に小さな洞窟があり（写真15），フルヘーリン洞と呼ばれている．現在も礼拝場になっている．松茂良興作がこの洞窟に住んでいた中国人に空手の教えをこうたことがあるとの説があることから，空手の関係史跡と考えられている．しかし，松茂良が教わった中国人が住んでいた洞窟は「カーミヌヤー」であるという説もある．

現　状：フルヘーリン洞に松茂良興作に関する説明文などはない．

写真15　フルヘーリン洞・内部

4．そ　の　他

4－1．沖縄県立第一中学校（文献144，145からの引用）

所在地：那覇市首里真和志町2－43（現在の首里高校）

説　明：1905年（明治38年）に沖縄県内で中学校としては初めて空手が正科として取り入れられた学校である．糸洲安恒の弟子である花城長茂が体育の時間中に空手を教授し，1907年（明治40年）頃から放課後に糸洲安恒によって空手指導がなされていた．首里高校の学校史によれば，1798年（寛政10年）に創立された国学を前身として，1880年（明治13年）に首里中学校，1886年に沖縄尋常中学校，そして1911年（明治44年）に沖縄県立第一中学校と改称されたとされる．1891年（明治24年）に現在の敷地に移転している．ただし，学校史の中では1915年（大正4年）に柔剣道が，1929年（昭和4年）に空手が正課となったとされている．宮城長順なども在学（中退）していた．

現　状：空手に関係する石碑などは設置されていない．

写真16　沖縄県立第一中学校碑

4－2．沖縄師範学校跡碑（文献146からの引用および碑文をまとめた）

所在地：那覇市首里当蔵町１－４（沖縄県立芸術大学内）

説　明：1902年（明治35年）に空手が教科に取り入れられた学校である．空手は糸洲安恒によって導入され，当初は屋部憲通が師範代として週１回，放課後講堂で指導を行なっていたとされる．屋部の退任後は船越義珍らが師範代を務めた．沖縄師範学校は1880年（明治13年）に開校し，1881年（明治14年）に沖縄県立師範学校，1886年（明治19年）に沖縄県尋常師範学校，1898年（明治31年）に沖縄県師範学校にそれぞれ改称された．多くの糸洲門下生を出し，空手界に大きな影響を与えた．

現　状：空手に関係する記述は存在しない．

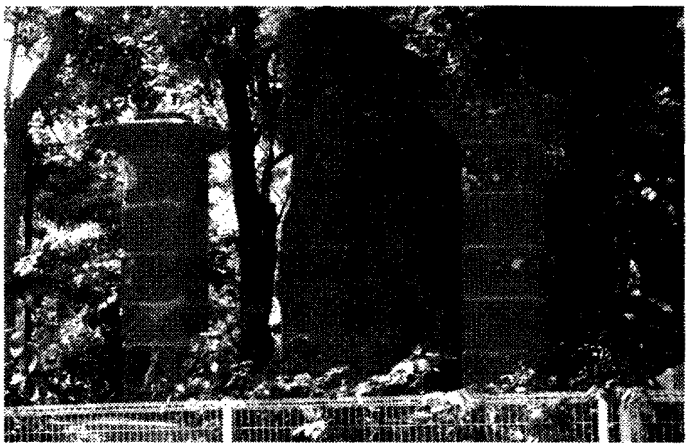

写真17　沖縄師範学校跡碑

沿革

明治十三年六月二十一日　小学校教員養成機関として創立
沖縄師範学校と称す
明治十四年四月　沖縄県立師範学校と改称
明治十九年四月　沖縄県尋常師範学校と改称
明治三十一年四月　沖縄県師範学校と改称
昭和十八年四月一日　沖縄女子師範学校と合併し、沖縄師範学校男子部と称し専門学校程度の官立の学校となる
昭和二十一年一月二十九日　行政分離により廃校
昭和五十五年　母校の創立百周年を記念し
昭和六十一年十一月二十三日　この碑を建立
龍潭同窓会

図9　沖縄師範学校跡碑・碑文

4－3．奥武山公園（文献147からの引用）

所在地：沖縄県那覇市奥武山町（沖縄県護国神社付近広場）

説　明：長嶺将真によれば，1916年（大正5年）に那覇区小学校連合運動会が行なわれ，船越義珍の指導の下，小学3年生以上の男子200名余りが「ナイハンチ」と「ピンアン」の型を団体演武した場所とされている．

現　状：空手に関係する標識はない．

4－4．天尊廟（文献148，149からの引用）

所在地：那覇市若狭1－25－11（波之上宮そば）

説　明：『久米村の民俗』によれば，「天尊廟は現世の邪悪を絶滅して衆生を救助する「九天応元雷声普化天尊」という道教の神を奉祠し，永楽年間閩人三十六姓が来琉した頃，波之上の現在地に建立された」とされている．外間の調査によれば，大正年間に天尊廟の書庫に『武備誌』が保管されていたとされており，沖縄に伝わる『武備誌』が天尊廟を建立した久米（閩）36姓によってもたらされたとする久米36姓輸入説の1つ

の根拠となっている．中国で知られる古典兵法書の『武備誌』は茅元儀によって1621年に編纂されたものであり，久米36姓の来琉が1392年とされることから，久米36姓輸入説を否定する意見もあるが，実際には中国で書かれた『武備誌』と沖縄に伝わっている『武備誌』では内容に大きな隔たりがあり，同一のものと考えることは出来ない．よって，沖縄に伝わる『武備誌』の1つのルートとして，久米36姓輸入説の可能性は存続されるものと考えられる．

現　状：空手に関係する標識はない．

写真18　天尊廟

4－5．久米36姓碑（文献150からの引用および碑文をまとめた）

所在地：那覇市松山1－17　松山公園内

説　明：1392年，「明初に洪武帝の命で福建省福州県を主として閩地方の36姓が来琉し」，唐栄（唐営）と称して久米村に居住したことから久米36姓と呼ばれる．閩人36姓と呼ばれることもある．彼等は選抜された様々な技師として来琉したこともあり，政治的な発展をもたらしただけではなく，書道，造船，空手といった文化面に対しても大きな影響を与えたとされる．

現　状：久米36姓碑が設置されているが，空手との関係を示す表記はない．

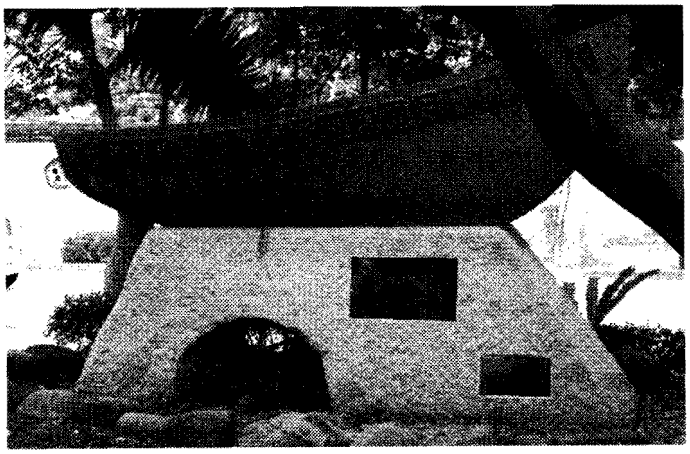

写真19　久米36姓碑

建立趣意書

今から六〇〇年前、中国の福建省から閩人三十六姓と呼ばれる人々が渡来し、この地に居を定め久米村（唐栄）を築きました。以来、久米村の人々は、外交文書の作成などを通して、王国の国際交流・交易を促進し、また中国の文化・文物を導入して、沖縄の政治・経済・文化の発展に大きく寄与しました。

ここに久米村が、沖縄の歴史と国際交流に果たしてきた役割を顕彰し、今後の友好・交流の発展を記念して、記念碑を建立いたします。

一九九二年十二月吉日

久米村六〇〇年記念事業期成会

図10　久米36姓碑・建立趣意書

4－6．那覇商業高等高校（文献151，152からの引用）

所在地：那覇市松山1－16－1

説　明：那覇手の大家である東恩納寛量が嘱託として空手を指導していた学校である．1915年東恩納寛量の死後は，高弟の宮城長順が指導にあたる．1929年（昭和4年）に空手が正課として採用され，引き続き1933年（昭和8年）まで宮城長順が指導した．学校史によれば，1905年（明治38年）に那覇区立商業学校として開校，1922年（大正11年）に市制となったため，那覇市立商業学校と改称されたとされている．

現　状：空手に関係する石碑などは設置されていない．

写真20　那覇商業高等学校・門柱

4－7．福州園（文献153からの引用と公園案内をまとめた）

所在地：那覇市久米２－29

説　明：中国福建省福州は，琉球王国時代に中国において琉球との貿易の玄関口となった地である．当時は同地に琉球館が置かれていた．ここを通った商人や役人は中国からの拳法伝播に大きく関与している．福州園は，1992年（平成４年）に中国福建省福州市と那覇市の友好都市締結10周年および那覇市市制70周年を記念して完成した庭園で，園内は中国の雄大な自然と福州の名勝をイメージして造られている．

現　状：一般の公園として開放されている．空手に関する表記はない．

写真21　福州園・内景

引用文献

1) 宮本知次，中谷康司，青木清隆，小林勝法，数馬広二，外間哲弘（2005）空手道の近代化をめぐる船越義珍に関する研究課題，中央大学保健体育研究所紀要23：95-127頁
2) 宮本知次ら（2005）前掲書：95-127頁
3) 岩井虎伯（2002）本部朝基と琉球カラテ，愛隆堂：173-177頁
4) 沖縄県教育委員会文化課・編（1994）空手道・古武道基本調査報告書，榕樹社：28-34頁
5) 外間哲弘（1984）沖縄空手道の歩み，自費出版：205-232頁
6) 立命館大学空手道部OB会事務局・編（1998）立命館大学空手道部沿革誌，立命館大学空手道部OB会事務局：236-244頁
7) 井上俊（2004）武道の誕生，吉川弘文館：37-48頁
8) 富名腰義珍（1990）空手道教範（1935年の復刻版），カヅサ：11-14頁
9) 外間哲弘（2001）空手道歴史年表，沖縄図書センター：32頁
10) 琉球新報（1914）1月17日～19日
11) 富名腰義珍（1990）前掲書：11-14頁
12) 富名腰義珍（1990）前掲書：11-14頁
13) 富名腰義珍（1990）前掲書：11-14頁
14) 外間哲弘（2001）空手道歴史年表，沖縄図書センター：36頁
15) 富名腰義珍（1990）前掲書：11-14頁
16) Patrick McCarthy and Yuriko McCarthy (2004) Funakoshi Gichin Tanpenshu, International Ryukyu Karate Research Society: pp. 158-163.
17) 富名腰義珍（1990）前掲書：11-14頁
18) 岩井虎伯（2002）前掲書：187-192頁
19) 富名腰義珍（1990）前掲書：11-14頁
20) 富名腰義珍（1994）琉球拳法唐手（1922年の復刻版），緑林堂書店
21) 富名腰義珍（1996）錬胆護身唐手術（1925年の復刻版），緑林堂書店
22) 岩井虎伯（2002）前掲書：193-201頁
23) 小沼保（1993）本部朝基正伝，壮神社：5-6頁，20-28頁
24) 岩井虎伯（2002）前掲書：193-201頁
25) 外間哲弘（2001）空手道歴史年表，沖縄図書センター：40頁
26) 小山正辰（1999）年表・宮城長順と日本空手道，空手道研究4：24-32頁
27) 外間哲弘（2001）前掲書：40頁
28) 東京農業大学農友会空手部五十年史編纂委員会（1982）東京農業大学農友会空手部五十年史，東京農業大学農友会空手部OB会緑空会事務局：207-237頁
29) 三田空手会・編（1999）慶應義塾体育会空手部七十五年史，慶應義塾大学体育会空手部・三田空手会：29-30頁
30) 仲宗根源和・編（1991）空手道大観（1938年の復刻版），緑林堂書店：64頁
31) 富名腰義珍（1994）前掲書：1-8頁
32) 三田空手会・編（1999）前掲書：116-117頁
33) 儀間真謹・藤原稜三（1986）対談近代空手道の歴史を語る，ベースボール・マガジン社：139-148頁
34) 東京農業大学農友会空手部五十年史編纂委員会（1982）前掲書：207-237頁
35) 藤本博（2002）『同大空手道』の歩み，真誠春秋（同志社大学空手道部OB・OG会報）2号：3-4頁

36）照井徳行・編（1998）松濤翁船越義珍先生生誕百三十年・松濤館六十年のあゆみ記念誌，日本空手道松濤會：136-147頁
37）中島智雄・津山克典・松倉栄重・編（1979）拓殖大学麗沢會空手部五十年史：2-13頁
38）三田空手会・編（1999）前掲書：306頁
39）東京農業大学農友会空手部五十年史編纂委員会（1982）前掲書：207-237頁
40）明治大学体育会空手部創立50周年記念編纂委員会・編（1990）駿空五十年（明治大学体育会空手部創立50周年記念），明治大学駿台空手会：62-63頁，176頁
41）三田空手会・編（1999）前掲書：37-40頁
42）照井徳行・編（1998）前掲書：136-147頁
43）富名腰義珍（1990）前掲書
44）東京農業大学農友会空手部五十年史編纂委員会（1982）前掲書：207-237頁
45）岩井虎伯（2002）前掲書：231-234頁
46）高木正朝（1988）嗚呼風雪空手道，牧羊社：25-29頁
47）水上八郎（2002）廣西元信先生の偉大なる年譜とその意義，廣西元信追悼録（玉井俊三・編），日本空手道松濤會：36-43頁
48）大西栄三（1999）空手史，龍書房：112-115頁
49）仲宗根源和（1997）空手の話（1939年の復刻版），榕樹書林：34-37頁
50）仲宗根源和・編（1991）前掲書：299-414頁
51）外間哲弘（1984）前掲書：205-232頁
52）井上俊（2004）前掲書：179-188頁
53）杉山重利（2002）武道教育の変遷，武道論十五講，不昧堂出版：49-57頁
54）杉山重利（2002）前掲書：49-57頁
55）内藤武宣・編（1982）早稲田大学空手部の五十年，稲門空手会：70頁
56）三谷和也（1978）近代空手道の教育史，月刊空手道4(16)：4-13頁
57）照井徳行・編（1998）前掲書：136-147頁
58）東京農業大学農友会空手部五十年史編纂委員会（1982）前掲書：207-237頁
59）東京農業大学農友会空手部五十年史編纂委員会（1982）前掲書：207-237頁
60）三田空手会・編（1999）前掲書：307頁
61）儀間真謹・藤原稜三（1986）前掲書：353-363頁
62）東京農業大学農友会空手部五十年史編纂委員会（1982）前掲書：207-237頁
63）照井徳行・編（1998）前掲書：136-147頁
64）伊藤東一・編（1957）月刊空手道2(9)：15-18頁
65）高木正朝（1988）前掲書：97-155頁
66）伊藤東一・編（1958）空手道1(1)：41-46頁
67）東京大学空手部六十年史記念号編集委員会・編（1985）東京大学空手部六十年史，東京大学拳法会：193-218頁
68）岩井虎伯（2002）前掲書：231-234頁
69）三田空手会・編（1999）前掲書：43-47頁
70）岩井虎伯（2002）前掲書：235-237頁
71）東京大学空手部六十年史記念号編集委員会・編（1985）前掲書：29-30頁
72）儀間真謹・藤原稜三（1986）前掲書：139-148頁
73）江上茂（1977）空手道入門，講談社：103-112頁

74) 富名腰義珍（1994）前掲書：7-8頁
75) 富名腰義珍（1996）前掲書：7-8頁
76) 東京農業大学農友会空手部五十年史編纂委員会（1982）前掲書：207-237頁
77) 外間哲弘（2001）前掲書：71-75頁
78) 宮城篤正（1987）空手の歴史，ひるぎ社：133-185頁
79) 宮城篤正（1987）前掲書：133-185頁
80) 宮城篤正（1987）前掲書：133-185頁
81) 宮城篤正（1987）前掲書：133-185頁
82) 宮城篤正（1987）前掲書：133-185頁
83) 外間哲弘（2001）前掲書：79頁
84) 財団法人全日本空手道連盟公式ホームページ：http://www.karatedo.co.jp/jkf/
85) 久保田正一（1992）武道空手攻究，一橋大学空手道部一空会
86) 山下文一（2001）「競技空手」と「伝統空手」，真誠春秋（同志社大学空手道部OB・OG会報）創刊号：2頁
87) 摩文仁賢榮（2001）武道空手への招待，三交社：121-150頁
88) 外間哲弘（2001）前掲書：92-94頁
89) 沖縄県教育委員会（1994）空手道・古武道基本調査報告書，榕樹社：1-3頁
90) 沖縄県教育委員会文化課・編（1995）空手道・古武道基本調査報告書・Ⅱ，榕樹社：1-2頁
91) 沖縄県教育委員会・編（1995）沖縄空手・古武道グラフ，守礼堂
92) 守礼堂・編（1997）世界に躍進する沖縄空手・古武道，守礼堂
93) 外間哲弘（1999）沖縄空手道・古武道の真髄，那覇出版社：10-34頁
94) 沖縄県無形文化財一覧
95) 沖縄県無形文化財一覧
96) 沖縄県デジタルアーカイブ「Wonder沖縄」：http://www.wonder-okinawa.jp/
97) NPO法人 沖縄空手道・古武道支援センター公式ホームページ：http://www.okinawa-karate.jp/
98) NPO法人沖縄空手道・古武道支援センター・編（2005）平成16年度沖縄空手交流推進事業報告書，NPO法人沖縄空手道・古武道支援センター
99) 沖縄県教育委員会・編（1995）前掲書：57頁
100) 大西栄三（1999）前掲書：106-172頁
101) 錬道館空手研究会・編（1964）沖縄空手道並に王統記，錬道館空手研究会
102) 上地完英（1977）沖縄空手道：その歴史と技法，上地流空手道協会
103) 大西栄三（1999）前掲書：106-172頁
104) 照井徳行・編（1998）前掲書：136-147頁
105) 照井徳行・編（1998）前掲書：136-147頁
106) 松濤館ホームページ・沿革：http://www.shotokai.jp/japanese/about/history.html
107) 三田空手会・編（1999）前掲書：116-117頁
108) 三田空手会・編（1999）前掲書：29-30頁
109) 小山正辰（1999）前掲書：24-32頁
110) 沖縄県教育委員会文化課・編（1995）前掲書：3-5頁
111) 沖縄県教育委員会文化課・編（1995）前掲書：12-13頁
112) 島袋幸信（2006）上地流空手道，東京図書出版会：13-24頁
113) 長嶺将真（1986）史実と口伝による沖縄の空手・角力名人伝，新人物往来社：57-75頁

114）沖縄県教育委員会文化課・編（1995）前掲書：3-5頁
115）儀間真繁・藤原稜三（1986）前掲書：37-46頁
116）藤原稜三（1990）格闘技の歴史，ベースボール・マガジン社：625-697頁
117）外間哲弘（2001）沖縄空手列伝百人，自費出版：16-17頁
118）首里城研究グループ（1998）首里城ハンドブック，首里城公園友の会：10-15頁
119）沖縄県教育委員会文化課・編（1995）前掲書：3-5頁
120）長嶺将真（1986）前掲書：77-94頁
121）外間哲弘（2001）前掲書：35-36頁
122）長嶺将真（1986）前掲書：77-94頁
123）照井徳行・編（1998）前掲書：136-147頁
124）宮本知次ら（2005）前掲書：95-127頁
125）照井徳行・編（2004）船越義豪追悼録―船越義豪先生没後六十年記念―，日本空手道松濤會：42-43頁
126）宮本知次ら（2005）前掲書：95-127頁
127）沖縄県教育委員会文化課・編（1995）前掲書：6-8頁
128）金城昭夫（2001）空手伝真録，沖縄図書センター：124-140頁
129）東恩納盛男（2001）剛柔流空手道史，チャンプ：1-20頁
130）沖縄県教育委員会文化課・編（1995）前掲書：6-8頁
131）外間哲弘（2001）前掲書：53-54頁
132）東恩納盛男（2001）前掲書：25頁
133）小山正辰（1999）前掲書：24-32頁
134）沖縄県教育委員会文化課・編（1995）前掲書：9-10頁
135）沖縄県教育委員会文化課・編（1995）前掲書：9-10頁
136）外間哲弘（2001）前掲書：18頁
137）渡嘉敷唯賢（1986）沖縄剛泊会空手道―20年のあゆみ―，沖縄剛柔流・泊手空手道協会：32-34頁
138）外間哲弘（2001）前掲書：18頁
139）渡嘉敷唯賢（1986）前掲書：32-34頁
140）外間哲弘（2003）空手史跡ガイドブック，自費出版：39-40頁
141）外間哲弘（2001）前掲書：18頁
142）渡嘉敷唯賢（1986）前掲書：32-34頁
143）金城昭夫（2001）前掲書：119-123頁
144）外間哲弘（1984）前掲書：210-213頁
145）首里高校学校史：http://www.shuri-h.open.ed.jp/
146）外間哲弘（1984）前掲書：213-218頁
147）長嶺将真（1986）前掲書：111頁
148）外間哲弘（1984）前掲書：295-304頁
149）具志堅以徳，国吉有慶（1989）久米村の民俗，社団法人久米崇聖会：24-25頁
150）具志堅以徳，国吉有慶（1989）前掲書：4-10頁
151）外間哲弘（1984）前掲書：218-224頁
152）那覇商業高等学校沿革：http://www.naha-ch.open.ed.jp/
153）儀間真繁・藤原稜三（1986）前掲書：11-24頁